矢作川流域圏懇談会「海部会ＷＧ」準備会議開催報告

1. 実施概要

(1)実施概要

○実施日時：平成 24 年 7 月 5 日(木)
18:30 ～ 20:30

○開催場所：豊橋市民センター
（カリオンビル）５Ｆ大会議室

○参加者：12 名（事務局含む）

(2)内容

【プログラム】

１．青木座長あいさつ
２．参加者の自己紹介（近況を含めて）
３．平成 24 年度の行動計画とその具体化
４．学識者の変更
５．今年度の各部会の運営方針
６．全体会議の出席者の増減
７．他

会議風景

会議風景

2. 主な会議内容

地域部会ＷＧ準備会議では、今年度の海部会ＷＧの行動計画等に関する意見交換を行った。ＷＧで話し合われた内容は以下のとおり。

- ○ 流木調査については、その状況が発生した際に矢作川水系が一斉に速やかに調査に取り掛かれるよう、調査体制や調査様式を準備する方向で検討を進める。
- ○ 干潟の生き物調査と干潟再生については、健全な状態を示す指標の一般化が難しいため、当面、イベントへの参加などにより情報収集を進めていく。
- ○ アクセス調査については、８月中の貝堀などが行われている間に利用実態などを把握する調査を行う。
- ○ 漁協との連携は、潮干狩り客が増えるなどの漁協にもメリットがある活動の取組みや宣伝効果がないと難しい面もある。当面、先進的に取り組まれている東幡豆漁協の取組みを学びながら検討を進める。

1. 現地見学会概要

（1） 平成 24 年度の行動計画とその具体化に関する意見交換

意見交換（ ・ ご意見、提案 ➢ 回答 ）

〇参加メンバーの追加について

- 「味わって知る わたしたちの海」などの活動をされている大矢美紀さんが正式に海メンバーに入って頂くことで確認がとれたのでここで報告する。（事務局）

〇漁協連携や進め方などについて

- 海地域は人が少なく他のイベントへの参画を基本に連携を深めていかなければならないが、矢作川流域圏として見に行ってどう活かすのかという目標が見えない（立てづらい問題がある）。まずは、個々の活動をどうやっているかを勉強になればと思う。（青木）
  - ➢ 今年はそういう勉強に行くだけで、何か流域圏として連携して何かをするということはないか。流域圏と漁協との連携は是非進めたいが、すぐに何かを動かすのを難しく現在も市民参加の取組みなどを率先されている東幡豆から考えていきたい（事務局）
- ツメタガイなど二枚貝を食べてしまう食害生物を調査の中で探していって駆除するような漁業者にもメリットのある調査などは提案できないか。(事務局)
  - ➢ ツメタガイに関してはなかなかその観察会に参加して効果を上げるというのは難しい。ツメタガイは夜行性ですから日中ほとんどいない。ただ、目についてできることがあるとすると、卵があるんですね、それを行った時に拾うということはできます。それでもって漁協の方で助かる程の活動には多分ならない。（石田）

- 漁協との協力で実施した活動やアサリの美味しさが宣伝になれば、連携できる漁協は増えるのではないか。（青木）
  - ➢ 漁協にとっての宣伝効果の期待としては潮干狩り客を呼ぶ点がある。潮干狩りのお客さんがたくさん来てくれたら漁協は助かる。そのための宣伝になるということであれば、今後、突破口になる気もする。（石田）
- 東幡豆漁協は積極的に市民参加イベントを行っているが、活動の中でも結果、アサリを捕らせている。（事務局）
  - ➢ 東幡豆は元々漁協の経営が潮干狩りで成り立っている特異的な漁協である。年間の潮干狩り客が何万人も入って、それで県有数のトップクラスの実は経営状況である。そのため東幡豆漁協は明確にお客さんを呼ぶような PR になるのであれば、積極的な面もあると考えられる。ただ元々、普通の漁船漁業が主体であった漁協から見れば、潮干狩りは所詮ごく一部でやっているようなものでなかなかそこまで行っていない。ただ、最近はだいぶそれが変わってきている。（石田）
- 活動の中で障壁みたいなのがある。１つは、以前にも言ったとおり漁業者というのは基本的には市民が入ってくると言うのは場合によったら生活の糧を略奪されるんではないかと

いう心配があってそれが障壁になっている。もう 1 つは海は三河湾なら三河湾一帯として本来扱わないと難しいが、流域圏では一応、西尾市までということで境界を設けてしまっていることも障害になる。三河湾の漁にしろ海の活動団体は三河湾全体で活動しているのが殆どで、局所的に頻繁に利用する所があっても、西尾市と限ってしまうとみんな境界の外になり、そういった市民の参加が望めない。この 2 つが大きな障壁になっている。その点、流木は三河湾全体、あるいは場合によって伊勢湾まで含めて捕らえ、それをまた矢作川の流域圏に返してくるイメージとして理解しやすい。（石田）

- ➢ おそらく、流域圏としては手を広げてしまうと人の少なさからも大変なことになるので、一応、範囲を狭めておくのが良いと考える。外との連携については、管理者の愛知県、国交省など当然専門的に分析している機関などとも連携をしながら、流域圏では我々はこういうことを始めたけど、湾全体としてはどうなっているかというようなキャッチボールをモデルケース的に図っていければ良い。（事務局）

〇ゴミ、流木関係について

- ・ この間の台風、4 号、5 号の結果では、矢作川は自然由来のゴミは結構あるけど、流木はほとんどなく思ったよりゴミが流れてきていない。土砂崩れがなければ殆ど流木は出てこない。もしかすると今年は流木が発生しない可能性があるが、ただ来た時には流域で一斉にすぐ状況を把握できるような体制と様式を準備しておくのはやっておきたい。今後、どういう調査票を作るか、どういう形態で動くかという話を港湾管理者や県などを含めて詰めておく必要がある。（事務局）
- ・ 豊川は流木があった。流木が漁港の中の試験場の前に入ってきて、港の中ではあっちいったりこっちいったりするため結局陸に上げ、ダンプ一杯位になった。（蒲原）
- ・ イメージは、調査する方と片づける方との架け橋をしようということになるか？（蒲原）
  - ➢ それができたらいいと考えるがどこまでできるかが問題。（事務局）

- ・ 井上先生、秋以降にはゴミや流木関係は大きな展開になるであろうか？（事務局）
  - ➢ 奈佐はなるであろう。奈佐は 3 県 1 市で取り組んでおり、愛知県はまだないが岐阜県は補助金を出す動きがある。当面、奈佐は毎年 1 回は必ず行くという方針。（井上）
- ・ 流域でのゴミ問題はどうやっていくかっていう方向性はまだ出ていないか？森と流域としてのゴミ問題、海のゴミの森とのとか、サミット的な物だとかそんな様な方向性は考えられているか。（事務局）
  - ➢ ゴミだけのサミットというのはあまり考えていない。ゴルフ場の名前が付いているゴルフボールやライターなどから流域ゴミを調べる事例はあるが、まだ、奈佐の浜では今のところは具体的には出ていなくて、漁業の人達との連携をやるには上流の特に流木に絞りながら、考えていきましょうということ進んでいる。（井上）

- ・ 六条潟はある意味で矢作川の流域の漁業が成り立つための非常に大きな資産であり、そこで硫化水素が出た際に見に行くことが必要である。調査が無理だとすれば、出た時の状況をみんなで情報共有だけでもしたい。（井上）

- ➢ 流域圏の取組みとしてはなかなか手は出せないが、情報共有することは良いと思う。まだ、現状としては足固めが重要な時期。（事務局）

〇アクセス調査について

- 土曜日か日曜日に潮のいい晴れている時に１日使って利用者の声を聴いたり、現場の写真を撮ったりするアクセス関係の調査するのはどうか？今はもう貝を採っていないか？（事務局）
  - ➢ だんだん減っていく。最近は、矢作川だと今シーバス釣り客が増えている。またウィンドサーフィンと水上バイクのアクセスに関しては両側とも入っているところも自然に決めてやっている。（高橋）
- 自然形態的にそういうルール化が出来てきたっていうことは重要なことでそんなところも整理をするのが良い。あとはどうみても入りづらいという状況や大体予測はつくが何が必要なのか、特に海辺は全くイメージが違うと思うので楽しみにしている。水遊び客でもいいので、8 月のどこかできる時 1 日にはめるということで進めたい。（事務局）

〇生き物調査、干潟再生について

- 先ほど言った干潟の健康診断の生き物調査は、前鈴木先生も言われたそんな簡単な健康診断ではしょうがないと言われたんですが、例えば干潟の健康診断っていうのは健全かどうかと言われるとやはり難しいのか？（事務局）
  - ➢ 評価する基準がぽんっと決まるというものではないですよね。100 人 100 色。（石田）
- 元々藻場があった場所などに藻場が今、どれ位の範囲あるというような項目別に分けて点数化するような発想はダメなのであろうか？（事務局）
  - ➢ 私の意見は結局、その場所によって良いか悪いかということでできる範囲の生き物調査というのは限られる。そういった限られた生き物調査でデータを経年的に積み重ねておいて、漁獲などと照らし合わせた結果、ある状態のとき不漁であったとか事後に判断していくしかない。（石田）
- そこは水産などに研究データみたいな物はないのか。（事務局）
  - ➢ 水産庁が中心になって干潟の健全度調査みたいなのをやっているが、結局結論は精査でていない。豊かさを示す生き物についてもなかなか一律的に診断するというのは難しい。こんな干潟もあるし、こんな干潟もある。（石田）
- そうすると必ずしも生物が多ければいいということでもないわけのか。（事務局）
  - ➢ 難しいところがあって、多様性と生物の量とはリンクしないんですね。今環境面では二言目には生物多様性って言っているけど、ところが例えば今、六条潟みたいなアサリが大量に発生すると、ああいった所というのは実は多様性というのは低いんです。だけど生物量から見るとべらぼうにいる。アサリ関係の漁師から見ればそれはアサリが大量に居る方がいい方に決まっている。（石田）
  - ➢ 元々は豊かな海ですから、私はあまり多様性っていうのは主流にはならないだろうなという気がする。そういう意味では干潟の生き物観察をやって、いろいろな生物を集めて、一生懸命集めて多様化させてみると、数値としては出てきますけど、多様度指

数が高い方がいいのかというとそれもやはり違う。（石田）

- そのデータを我々が蓄積することは多分できないだろうと、大変なことだろうと。そうなるとレベルをぐっと緩くしても健康診断的なやつは難しいか？（事務局）
  - 健康診断は難しいと思う。例えば生き物観察であるところに入っていって、例えば貝類を何種類見付けましょうとか、できるだけたくさん見つけましょうとか、あるいは泥をたくさんみつけましょうとか、泥を掘ってゴカイだとかを見つけましょう、そこを一生懸命みんなにやってもらって、何種類生物がこういう条件下で採取した場合に生物が何種類捕れただろうかと、その種類数なんかは結構目標を作れると。それが多くなったり少なくなったりすることで、今年は極端にこれが少ないから良くないんじゃないかとか、そういう考え方はできる。（石田）

- そうすると干潟再生をした場合にも矢作の砂を入れたとか、ああいう所が前と後でどんと生物が多分変わってくると思うが、増えて良くなったと言う評価はできるかもしれないが、初めて調査に行ったところで良い状態と判断する基準はなかなかないと理解できた。（事務局）
- 具体的な目標像みたいなものは言えないかも知れないが、生き物観察というのは非常に重要だと思うがどんなやり方をしたら良いだろうか？（事務局）
  - あまり行政マン的にこういう到達点っていうのを追求するのは難しい。その理由としてやはり今、市民に海岸付近の市民も含めて海に対する理解が無くなってきている。その理解を高める機運が求められる。（石田）
- では、干潟の生き物調査とヨシハラも含め干潟の再生については、情報共有も含め今やっている状況を概ね現地に 1 ヶ月に 1 回位イベントに調査に行ったりして、まず調べにいこうというような形でこの 2 つについては調整していきたい。まだ、今年は調査とか研究に力を入れた方がいいと思うので、そういう観点で整理をさせて頂く。（事務局）

- あともう 1 つ干潟再生については、土砂を上流から下流まで持ってくる仕組みを作る為には相当の社会的な合意形成が必要になってくる。海の方の再生から見れば当然砂が海に来て干潟を形成して欲しいと思われるだろうが、干潟再生に向けたいろいろな形での市民参加した成果、評価みたいなことが事業の理解向上につながると思う。（事務局）
  - 人工干潟をずっと見ているが、最近人が入って何か捕ったり、初めは鳥も入らなかったけど、鳥が入り始めている。（高橋）
- 7 月 22 日の午後、土砂の勉強会をやるので、是非参加をお願いしたいと思っている。（事務局）

- 水産試験場の方で矢作の河口の海側でシエビの調査をやった。（蒲原）
- ヨシエビというのは湾の奥の方で本来生息している漁獲対象になっている大型のエビです。かつては三河湾では大量に捕れてたが非常に激減してしまった。最近は多少は捕れるんですけどが、どうもそのヨシエビの初期の生息地というのが矢作川の河口から 6km 位上の間

に 1cm 位の着定直後のエビが結構いるので河川の下流域ではないかという見方をし始めている。（蒲原）

・ 河口から海に出たとたんに、ヘドロで調査網があがらない状態も見られる。（蒲原）

〇市民意識の向上について

・ 1 人の消費者になってスーパーに美味しいアサリを見ると殆ど愛知県産って書いてある。ああいう所に愛知県産という形じゃなく本当に干潟の大切さとか、どこの干潟で捕れたブランドって書いてもらうと消費者の干潟の大切さなどの意識は高まるかもしれない。（青木）

〇まとめ・その他について

・ 8 月はアクセスできれば潮のいい日を至急調べて手配し、それをメールする。ゴミの関係だけは大出水があった後、そのやり方だけを整理する。それ以外は、できればもう日程も含めてこんな時期にやりますというたたき台を作って具体化したものを整理する。（事務局）

・ 8 月 3 日全体会議では、石田先生は退職されたので学識者の変更と言うことで試験場としては身軽に動ける若い方ということで、今日来ていただいた蒲原さんに今度の 8 月 3 日の全体会議で確認を取らせて頂き正式に入って頂く。また、石田先生には引き続き残って下さいということでお願いして残って頂けました。（事務局）

・ 全体会議では運営方針や経過報告、年度末には 3 年間の総括をやりますので、そこでは青木先生にお力を貸して頂きたい。（事務局）

以上